～無音の奏者～

きっちょむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～無音の奏者～

【Ｎコード】
Ｎ２８８５ＢＡ

【作者名】
きっちょむ

【あらすじ】
主人公は代々雇われ殺し屋一家の養子で、ヴァリアーとは知り合い同士。
訳あって、ボンゴレファミリーの依頼は優先的におこなっている。
ある時、ボンゴレ九代目からの依頼で日本へ行くこととなった！
様々な秘密と人間模様を抱える主人公が、どう成長しツナ達をどう助けて行くのかが見所です…！

※リング争奪戦辺りからのお話となっています！

プロローグ

赤い…紅い…朱い…

俺が住んでた路地裏にはそういったものがいっぱいある。

死体から流れる血…
鉄の錆が混じった水…
そして…俺と同じ路地裏の住人だった少年の目……――

あそこが俺の出発点。
願わくば、俺の終着点とならんことを…――。

・・・・・・・・・・・・

大きな屋敷の広い部屋。
中世の品々が並ぶ棚や本棚、高級な机や椅子・小物の数々が置かれた書斎に、黒髪の若い青年が招かれた。
青年のうねる前髪は目元ぎりぎりまで伸びていてる。耳の脇から下の髪は刈り上げていてお洒落な今時の若者に見える。が、彼を纏う

雰囲気は好青年の落ち着いたおおらかなものと、不気味な何かが合わさったものであった。

部屋の主である気品溢れる老紳士は、書類が整理された机とセットの黒く大きなキャスター付きの椅子に腰掛けている。

老紳士は優しげに『にこり』と微笑むと、訪ねてきた青年に向かって口を開いた。

「君に仕事を頼みたいんだ。」

「貴方の頼みなら何でも請け負いますよ。ボンゴレ九代目。」

「はは…。しかし、今回の仕事は少し骨が折れる事になるだろう。」

「え…。そんなに…？

まぁ、そもそも暗殺部隊がいるのに俺に頼むくらいっすからね。一体どんな仕事ですか？…たいていの事なら熟せますけど。」

軽く引き攣らせた笑みで青年は答えた。

「あぁ。それはわかっているよ。だからこそ君に頼みたいんだ。…実は、私の孫のことなんだが…。」

「…？…まさか…九代目。…自分の孫を暗殺しろなんて貴方らしくないことを依頼するんじゃないでしょうね…？」

「…ちがうよ…。」

目を丸くして尋ねてきた青年に、困った笑顔で返す老紳士。

「…よかった。…あ…続けて下さい…。」

「…孫やその仲間に手を貸してほしい。」

「……？……」

「私の次のボンゴレボスを決めなければいけないのは、君も知ってるだろう？」

「…まぁ…。」

「彼らには君が必要になると思う。どうか、助けてやってくれ。」

老紳士の言葉を頭で反芻するように目を天井に向けて考えだした青年。

そして老紳士に目を戻し、苦笑しながら尋ねる。

「…一応確認しておきますが、俺の職業は殺し屋っすよ？」

「あぁ。知ってるよ。」

「な…ならいいんですけど。…あ。これ、長期任務になりますよね？」

「もちろん。なにかあれば全てこちらで保証するよ。」

「……あ、そうっすか…。ちなみに具体的にどうしろっていうのはないわけですよね？」

「そうだね。そこは君に任せるよ。信頼しているからね。」

「わかりました。こっちも生活がかかってるので何でもやります。あの……もう一つ…確認してもいいっすか…？」

「なんだね？」

「…九代目は…ザンザスに継がせる気はないのですか？」

「……その質問には答え兼ねるな……。」

老紳士は、優しげな笑顔で返した。
それを見た青年は、小さくため息をつき、諦めたように笑った。

「…わかりました…。
…何も聞かずにやりますよ。」

「…すまない。君には辛い立場を強いるね。」

「いいえ。気にしないでください。俺は報酬を貰えれば何も言いま

せん。」

「…ありがとう。ジョアジーオ。」

「いえ。こちらこそ、普段から御寵愛を承りましてありがとうございます。ドンボンゴレ。」

そう言ってジョアジーオなる青年は深々と頭を下げた。

■■日本の怖さ…■■（前書き）

日本にやってきた主人公。日本の怖さにため息ばっかついてます（笑）

■日本の怖さ…■

「ジャッポーネって…こんな感じだっけ…。
ま、考えてもしゃーないわな。リボーンを探そっ。」

俺は全く地理を知らない国の街中を歩いて行く。たった一つの情報である『並盛中学校』を捜して。
ドンボンゴレもさぁ、もう少し親切に教えてくれてもいいのになぁ。俺を信頼してんなら孫の住所くらい教えてくれてもいいと思うんだけど。
まぁ…、俺がヴァリアーと関係が近いってのもあるだろうし、俺の仕事上…そこまで情報を与える事は出来なかったってとこだろうけど……。

「にしても、平和な国だなぁー、ジャッポーネって。マフィアも殺し屋もいないって感じ。」

晴れ渡った青空を見上げ、俺は呟いた。最近じゃ、いろんな国のマフィアが日本に進出してきてるって聞くけど、全然そんな風に見えない。
…イタリアと比べちゃアレだけどさ。

そんな事を思いながら商店街の外れまで来ると、向こうから子連れの女性が歩いてきた。

『うん。平和な光景。』

俺は女性に挨拶してすれ違った。

『今のお母さん幾つなんだろう……ん？』

…すれ違ってからあることに気づいて後ろを振り返る。

『…あれ？あの子供らって…。』

実際面識がある訳ではないが、俺はあの三人の子供を知っている。間違いない。ジッリョネロのガキと俺と同業者のガキ…あと、アレは確か…

「…ランキング占いのフウ太…？日本にいたのか。」

あんまり姿を見せない少年を見て、俺は捜して欲しいと依頼してきたファミリーがいたことを思い出した。が、今日はそれと関係ない別件で日本に来たため、捕まえようとは思わなかった。だって、アイツを捕まえて一回依頼主に置いて来るにしても、アイツを捕まえて側に置いとくにしても面倒だしな。

…っつーか、どこの依頼主も俺の事を『何でも屋』だと勘違いしてんだよな～…。

クルリと俺は前を見て、また歩き出す。

人に道を聞きながら住宅地を通り過ぎてしばらく行くと、大きな建物が見えてきた。

『これが並盛中か～…。さて、どうするか。』

ここまではなんとか来たけど、まだ学校は終わっていない。時計を見ると今は午後2時。何時に学校が終わるかは知らねぇけど、それまではズカズカ入っていく訳にはいかない。
そこら辺はわかってる。きっと、個性的なマフィアや殺し屋達の中で、俺はかなり常識人だろう。
はっきり言って、常識的な行動をとっていないと目立つし、警察にご厄介になる可能性が出てくる。そんなリスクは負わないに限るのだ。

「…ねぇ。貴方、うちの学校に何か用？」

校門の前で考えていると、ふと学ランを身に纏った少年が声をかけてきた。
俺はまさか学生が出てくるとは思ってなくて、驚きのあまり無反応になってしまった。

「ねぇ。聞いてる？不審者なら噛み殺すよ。」

『え…。喧嘩っぱや過ぎでしょ。稀に見る不良少年だな…。髪は黒いけど…。』

噛み殺す発言にも気になったが、中学生だしそういう時期もあるかなって自己完結した。

「あぁ…。悪い。ここには人捜に来てんだ。だけどまだ学校は終わってないみてぇだから、ちょっと待ってた。」

俺が営業スマイルでそう言うと、この少年は俺の顔をまじまじと見てくる。

「そう。そいつの名前は？」

「え～…っと…。サワダ　ツナヨシ。」

ドンボンゴレから渡された紙に書かれてあった名前を思い出しながら俺は言った。正直、俺は日本語を読めない…。しゃべってるのも奇跡に近い。だから、少々片言で捜し人の名前を言うことになってしまっている。

「……そう。」

さっきと違って少し考えてから呟くように言った。

なんか…気になる反応だわな。

「もしかして、君…ツナヨシを知ってるのか？」

「知っているけど…頼らないでよね。面倒だから。」

『あ～～～～…コイツと合わないわ。』

だんだん話してて腹が立ってきたから、俺はその場をソッコーで退散することにした。

「…わかった。勉強頑張れよ～。餓鬼。」

俺は出来るだけの笑みでこの少年の目線に目を合わせ、語りかけた。
俺の身長は１８４だから、幾分屈む形になった。
少年の目に黒いものを感じたけど、俺はそのまま反応を待たず踵を返した。

ヒュン…ッ

物凄い速さで何かが俺の頭を掠めた。
気配を察して屈んだから避けられたけど、なかなか危なかった。
俺は避けたと同時に後を振り返る。

「…トンファー…ね…。」

『日本の不良の武器はトンファーなのか？』

そんなことを考えながら、少年の姿をまじまじと見た。

この身長で俺の頭を狙ってきたってことは、この少年にはかなりのバネがあるってことだ。凄い逸材だな。

「ワォ。避けるとは思わなかったよ。なかなかやるね。」

ギラギラと目を輝かせながら笑う少年に、俺は血が騒ぐのを感じた。けど、本能に任せた行動ばっかしてたらヴァリアーとかわんねー。それはなんか嫌だった。

「…悪いけどやんないよ。俺は暴力とか嫌いだから。」

「そんなの関係ないよ。」

「お前…将来が心配だわ〜…。」

俺はげんなりした。
俺もいろんな餓鬼を見てきたが、こんなとんでもない餓鬼は初めてだ…。

どうしようか悩んだ時、学校のチャイムが鳴り出した。
それと同時に、少年は少し気を逸らした…。俺はそれを見逃さず、ダッシュで逃げた。
後で何か言われたような気がしたが、気にしない。気にしてられない。

「ジャッポーネって怖い…。」

そう呟き、俺は大きくため息をついた。

・・・・・・・・・・・・・・・

学校が終わり、下校時間になるまで辺りを探索でもしようと考え、俺は学校周辺を歩いている。

先程と打って変わって、どうもこの町は犯罪関係者が多くいるみてぇだ。少し歩けばイタリアの黒スーツ男がいたり、見慣れた殺し屋がいたりする。なかなか暇をしないで暮らしていけそうだけど。

『…一体どうなってんだ？……アレ……？もしかして』

ある家の前を通りかかったとき、その家の前に立っている金髪の男を発見した。これはもしかしなくても…

「ディーノ！」

俺は男に向かって手を振った。

「あれ？え…っ？ジョアジーオ！？何で日本にいるんだよっ。」
ディーノはスゲー驚いていた。
「九代目に依頼されたんだよ。」
「はぁっ！？なんで？何を？」
「守秘義務があるからしゃべれねぇー。」
「はぁ～…。相変わらずみてぇだな。元気そうでなによりだ。」
「お前もな。生きてたんだ。」
「そりゃ、こっちの台詞だっ！」

俺達は学生時代、同じ学校で知り合ったんだ。俺の方が二つ下だから、同じ学年って訳じゃなかったけど。しかも、俺は家庭の事情で中退したしね。なのになんで仲が良いかっていうと、俺がフリーの殺し屋でコイツがマフィアのボスだからだ。依頼されたりしてたら、いつの間にかパーティーにも呼んでもらえるようになって、そんで仲良くなってったって感じ。多分、キャバッローネがボンゴレと同盟を組んでたってのも理由の一つだろう。うちの先代…つまりじーちゃんなんだけど、あの人はボンゴレ九代目と仲が良くてさ。何かと九代目に世話になってる俺としては、ボンゴレを敵に回すような仕事を請け負いたくない訳で…。自然とボンゴレの同盟マフィアに付くようになってたって訳だ。
それにしても、ホントにディーノはよくボスに成れたなーと思う。

リボーンのおかげらしいけど、覚悟を決めるのは自分だ。その覚悟を持つ人間に、俺にはどうも見えなかったんだよね。

「それより、ディーノはなんで日本に？しかも、民家の前に立ってんだ？」

「ん？お前九代目に会ったのにしらねぇのか？ここは九代目の後を継ぐ沢田綱吉の家だぜ。」

「！？…マジ？」

『ちょっと待て！何でディーノがツナヨシの住所を知ってて俺は知らねーんだ！？……九代目ぇぇ…』

俺は言いようのないショックからフリーズした。

だって…何回も言うけど、九代目は信頼してるって言ったんだぜ…？俺に……。

「ジョアジーオ…大丈夫か？」

「あ、あぁ…。で、なんでツナヨシの家に来たんだよ。」

「ん～、兄弟子として遊びに来たってかんじかな。」

「あぁ～、リボーンが教えてるんだもんな。なるほど。…俺さ、ツナヨシに用事あるから一緒に待っててもいい？」

「別に構わねぇぜ。お前に聞きたいこともあったしな。」

ディーノはすっと真顔になって言った。
こりゃ、仕事の話だろうなと察して、俺は笑って了承した。

■■日本の怖さ…■■（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

■■副業…■■（前書き）

面倒くさがり屋の主人公が自分について語ってます。でも、かなりハショリ気味で語ってます。

■副業…■

ツナヨシの家は留守みたいだったから、俺達はディーノの車の中で待つことにした。

ディーノの話というのは、やっぱり仕事の話で、同盟マフィアに俺の力を貸して欲しいと連絡があったため、是非力になってくれというものだった。

「俺の知らないマフィアだな。最近できたのか？」

「あぁ。っていうか、シュルーゾフんとこから独立したマフィアだな。」

「げ…。ちゃんとまともなんだろうな。」

シュルーゾフって言うのはロシアンマフィアの大物だ。スゲー変わった奴ってので有名なんだよな…。会ったことあるけど、見た目からちょっと…アレだったから。その部下と聞いて、まともな奴かどうかが一番気になる。

「あはは。大丈夫だって。あいつは比較的にまともだしいい奴だから。」

「あのさ、『比較的』ってのも気になるし…お前が『いい奴』って言うことが信用できない。…お前のいい奴の範囲が広過ぎなんだもんよ…。」

「お前なぁー、ちょっと見ない間に小せー男になったなぁ。」

「歳を重ねる毎に慎重になるもんですよ～、せ・ん・ぱ・い。」

そんなじゃれ合うような会話をしていると、俺の携帯が鳴った。

俺は携帯を二台持ってる。

一つは仕事用。ボンゴレを初め、各マフィアの連絡先や、同業者の連絡先が入っている。無くしたり水ポチャしたら…おしまいだ…。信頼が一番な仕事だから、最悪いろいろ誤解されて消されかねない。マフィアの世界はそういう厳しさがある。

今鳴っている俺の携帯は、それとは違うもう一つの携帯。

ディーノは、電話に直ぐに出ない俺を不思議そうに見てくる。

一呼吸置いてから、俺は携帯を開いた。

「…はい。」

『ジョアジーオ君か？今、日本にいるんだって？』

電話の相手は興奮気味にそう言ってきた。多分、さっき聞かされたんだろうな。

「はい。すいません。ちゃんと連絡しなくて。」

『いや、君が忙しいのはお祖父さんから聞いてたから。…だけど急だよね。何処の開場でコンサートがあるんだい？』

はい、この電話相手は俺の支援者的な人。この携帯はもう一つの俺の仕事関係者が登録されている。俺のもう一つの仕事…それは『バイオリニスト』。

いや、プロってわけじゃないんだけどさ。昔から耳と目だけは良くて、小さい頃にうちの爺さんから貰ったヤツで、見よう見真似で弾いてたら上手くなってったって感じ。

んで、マフィアのパーティーに呼ばれたら弾く…とかしてたら、いつの間にか支援してくれる人が出て来て…。

マフィアのパーティーって一般人もくるんだけど、今電話をしてる人はコンサートを手広く手がけている人なんだ。

俺の演奏を聞いて気に入ってくれたらしく、ちょくちょく俺にパーティーで演奏しないか？とか、うちのオーケストラで弾いてくれないか？とか言ってきてくれる。

嬉しいんだけどさ…、やっぱ違うじゃん？バイオリンは趣味だしね。そもそも、この人はカタギの人だから俺の本業知らないみたいだし、そんでちょくちょく連絡くれ過ぎるから仕事の携帯と別にするしかなくなったんだよ。

「ガルさん。今回は…こちらのお偉いさんの家に呼ばれての演奏なんで、ガルさんは呼べませんよ。」

なんか勘違いしてるみたいだから、それに乗って嘘をついた。

『そうなのか！？久しぶりに君の音を聞けると思ったのに…』

「あは～…。また今度ですね。」

『今度と言えば！次の金曜日、そっちでコンサートが開かれるんだ。是非君にも参加して欲しいんだけど。』

「あ～…無理っすね。仕事が入ってますので。あ、すいません。上司が呼んでるのでこれで質問します。」

『残念だ。また今度ね。』

相手の挨拶を聞き終わってから、すぐに携帯の電源を切った。嫌いじゃないし、むしろ感謝してるんだけど…、カタギの人とあまり親しくなりたくないってのが本心なもんで。理由？そんなのありすぎて言い尽くせねぇよ。

「…なんの電話だ？」

俺の様子を見て、ディーノは心配そうに俺の顔を覗き込んできた。俺は得意の営業スマイルを造り…

「いや、別に。」

と言ってやった。

「そっか。ならよかった。」

そう言うディーノの笑顔は引き攣っているように感じた。よくわかんねぇけど、『納得したが引っ掛かる』って言ってるように見えた。ま、だからといって説明すんのは面倒だから…しねぇけどね。ごめんなさい。

「さっきの話だけどさ、受けるよ。」

俺は話を戻した。
んで、仕事用の携帯を取り出し、その新しいマフィアの情報を調べはじめた。

「悪いな。でも、そう言ってくれると思ってたよ。」

ディーノは先程の違和感のある笑顔でなく、いつもの笑顔になっていた。切り替えができる大人って素敵だよね。

「おっ！帰ってきたみたいだぜ。」

ディーノが窓の外を指差した。

「へぇー。あれがサワダ　ツナヨシ…。」

茶髪で穏やかそうな顔。
絶対優しい争いを好まない人間だろう。
こんな奴がボンゴレの血を受け継いでいるのかと思うと、なんだか辛くなってくる。ボンゴレの血なんて関係なく継承できるならばどれ程いいだろう。
ツナヨシに限らず、『アイツ』にとっても……―。

■■副業…■■（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました！

■■仲良くしよう…■■（前書き）

ツナが主人公を生理的に受け付けてくれません…。

■■仲良くしよう…■■

「よっ！ツナ！」

「えっ！？ディーノさん！？…と…誰ですか！？」

いきなり黒塗りの車から出て来た俺達を見て、ツナヨシは困惑しているようだった。

「俺はジョアジーオ。ボンゴレにはいつもお世話になってる雇われ殺し屋だ。」

「え～！！？何で殺し屋の方がうちに来るの！？」

ツナヨシは頭を抱えてうろたえてる。普通はそうなるけどさ、知り合いのディーノがマフィアなんだから、殺し屋が尋ねてきたって不思議じゃないよなー？

「九代目から依頼されたんだ。君を助けてほしいって。」

にっこり微笑みながら言ってやる。最初の印象は大事だからね。それに、これから仲良くしてかなきゃいけないんだから。

「お、俺を…？」

「そう。あ…リボーンはいる？アイツがいると話も早くなるはずなんだけど。」

「俺ならここにいるぞ。」

リボーンはツナヨシの家の二階から飛び降りて登場した。相変わらず神出鬼没…ってか、もっとましな登場あるくね…。

「久しぶりだな。ジョアジーオ。生きてたのか。」

「さっきディーノにも同じこと言われた…。そんなに死にそうか？俺…。」

「あぁ。人より危ない橋を渡ってる分そうなるだろ。背中は何時も気をつけていた方がいいぞ。」

リボーンはニヤッと笑った。
リボーンはそう言うけど…そんなに変わんないと思うぜ？むしろリボーンの方が危ない橋を渡ってんじゃん。って思ったけど、言うと銃で撃たれそうだから黙ってマス。

「そりゃ、ご忠告どうも。」

それに笑顔で返してから、俺はツナヨシに向き直った。
ツナヨシは少し怯えた様子で俺を見上げてくる。

なんでだろうな？自分で言うのもなんだけど…ぱっと見た感じじゃ、俺は優しい好青年なはずだ。これもボンゴレの血の力なんだろうか…。
俺の何か黒い部分を感知してるのかも知れないな。

「ツナヨシ。今の状況について確認したいことがあるんだ。内容も内容だから中に入れてもらえるか？」

「あ、は…はい！」

慌てたようにツナヨシは玄関の鍵を開けにいった。
その様子を見ながら、俺はリボーンに声をかける。

「なぁ。アイツにボンゴレを継承させんのってさ、ちょっと酷じゃねーか…？」

「…今回、その件について話に来たのか？」

「あぁ…。」

リボーンの顔に影が落ちる。

「あ、あの！中にどうぞ！」

ツナヨシは、なかなか入って来ない俺達に対して声をかけてきた。

リボーンと少し目配せをして、中に入ろうとした時、ディーノが俺の肩を叩いた。

「なんか大分取り込んでるみたいだから、今日は帰るよ。ツナによろしく言っといてくれ。」

「え？別に居たって構わねぇぜ？」

「いや、また今度聞くことにするよ。じゃぁな。」

からっと笑ってから、ディーノは手を振って車に乗って行ってしまった…。

「あいつなりに気を使ったんだろうな。」

「…別にいいのに…。」

そう。別にアイツはツナヨシ側なんだから居たっていいんだ。どっちかって言うと、俺の方が場違いだよな。

・・・・・・・・・・・・・・・

「はい、でどんなご用件でしょうか…？」

ツナヨシは固い表情で俺の顔を伺ってきた。

俺はディーノの事を伝えた後、ツナヨシの部屋に案内され、お茶を持って来ようとするツナヨシを留めて、今向かい合うように座っている…。

「え～…と、まず確認。

ツナヨシ。殺し屋に会うのは初めてか？」

「へ？」

素っ頓狂な顔をするツナヨシ。

「い、いえ。何人目だろ…四・五人目位でしょうか…。」

「マジか。だったら俺の事だってそんなに怖くねぇだろ？びくつくなよ。」

「あ…はい。でもなんか…今まで会った殺し屋の人達は子供とか女の人だったんで…。貴方みたいな本格的な殺し屋っぽい人は初めてで…。」

慌てながら説明してきた。

『子供？女？だいたい検討がつく。日本に来てすぐに見つけたあの餓鬼達。それと、最近巷で聞くビアンキとかだろうな。リボーンが

ここにいるし。
…いやいや！そんなことより…俺のどこが本格的な殺し屋っぽいんだよ…！おかしいだろっ。』
笑顔を崩すこと表は平静を装っているが、そんな事が俺の頭を駆け巡った。

「隼人もここにいたりするのか？」

とにかく変なところで話を変えるのもアレだから、ちょっと質問してみることにした。

「え！？獄寺君と知り合いなんですか！？」

「う～ん…。むかーしね。どっちかって言うとビアンキと知り合いかな。
最近はどっちとも会ってないからどんだけ成長したのかはしらないよ。」

隼人の話を出すと、ツナヨシの顔の緊張が少し解れた気がした。
もしかして友達同士なんだろうかと聞こうと思ったが、今まで黙って様子を伺っていたリボーンの殺気を感じたから…やめた。

「おい、ジョアジーオ。さっさと本題に入れ。」

ツナヨシももっと隼人と俺について聞きたいみたいだったけど、そう言われたら仕方がないからお互いに折れる形になる。

さっそく、俺は本題に入ることにした。

「…はいはい…。
え～っと…、…ヴァリアー…来なかったか？」

「「は？」」

いきなり直球で尋ねたら、ツナヨシとリボーンの反応がハモった。
うーん…、来てないと取っていいんだよな。

「直に継承が始まる。遅かれ早かれ会うことになる。その時に困ったことがあったら俺を呼んでくれ。
まだアイツ等が来てねーみたいだからいいけど。」

「…とうとうか…。」

「な、何なんですか？それ。」

リボーンは理解が速いから、直ぐに俺の話について来てくれたが、ツナヨシはそうもいかない。
継承者だからって言っても、それ程詳しいボンゴレの内部事情は知

らないようだ。しかないよな…。

「見れば分かると思うぜ。暫くここら辺に滞在する予定だからさ、なんかあったら電話して。リボーンは俺の携帯番号知ってるだろ？」

「ああ。」

「よし！じゃ、そういう事で！」

ヴァリアーの話はリボーンに任せる事にして、俺は軽いノリで帰ろうとした…。が…

『ジャキ…』

リボーンが銃を向けていたから手を挙げ、固まった。

「…な、なに？」

恐る恐る尋ねてみる。

「困ったことが起こるのか？」

「…そうなりそうってこったろ…。

俺だって詳しい話は聞かされちゃいないんだ。なにせ、ボンゴレに囲われた殺し屋集団が相手だ。そんな奴等のボスと関わりのあって、

しかもボンゴレとは無関係な俺を、信用出来ないのは当たり前だけどな…。はは…。」

先程のディーノの会話を思い出し、俺はうなだれる…。

『信用されてないって……俺、殺し屋として駄目じゃん…』

「……お前の使い道を教えろ。俺が上手く使ってやる。」

リボーンは銃を仕舞いながら言ってきた。
相変わらず上から物を言ってくる奴だ。…それに値する実力があるから凄いよな。

「…え～……。」

「どうせこっちが何も頼まなきゃ、お前は動く気がねぇんだろ。だったら早めに働いてもらおうじゃねぇか。
報酬はもうもらってんだろ？」

「まぁ…」

流石リボーン…。考えてることに無駄がない…。
本当はちょっと日本を観光したかったんだけど、それは諦めるしかなさそうだ。

「…そうだな…。俺の扱い方ね…。
修行するときの指導役とか、メンタルケアかな。」

「え？メンタルケア？」

今まで話について行けずに黙っていたツナヨシが口を開いた。

「そう。まぁ、話を聞くだけだが…出来ることがあったら協力は惜しまねぇよ。」

俺の言葉に、ツナヨシは初めてほっとした笑顔を見せた。

■■仲良くしよう…■■（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

まだまだ続きます。

■■電話の電源を切りたくなる…■■（前書き）

主人公はツナを微笑ましく思っています。
そしてスクアーロを友達だと思っています。

でも、二人は主人公をどう思っているからわかりません。

■電話の電源を切りたくなる…■

俺がツナヨシの家を尋ねてから、あっという間に時間が過ぎた…。
ツナヨシに説明するのは結局俺になり、仕方なく…優しく丁寧に教えました…。

晩御飯とかいただきまして、本当に恐縮です。
いや、俺そんなに裕福じゃなかったんで、こういう事しともらうと恩を感じちゃうんだよね。

っつーか、今日すれ違った子連れの母親がツナヨシの母さんだったなんてな〜。あの癖のある餓鬼の面倒を見てるなんて凄すぎるわ…。
そして、何より驚いたのは晩飯の席で…ビアンキに会ったこと。

「…ジョアジーオ。貴方何やってるの？」

「……お前こそ……。この家に世話になってんのかよ。」

「そうよ。リボーンがいるもの。」

おかしいおかしい…。
いや、俺の予想が甘かったのか…？リボーンがいるところにビアンキ有りとは思っていたが、一緒に住んでいるとは……。
俺とビアンキの間に気まずい雰囲気をのこしつつ…
とにもかくにも、俺はサワダ一家と仲良くすることに成功した。

…………

「あの、質問してもいいですか？」

ベッドの上で胡座をかきながら、静かな声色でツナヨシが声をかけてきた。

飯をいただいた後、俺はまたツナヨシの部屋にいた。

リボーンはもう寝ている…。身体が赤ちゃんだから寝るのも早いんだと…。

納得できるようでできない理由だよな。デカかったこいつを知ってるだけに…。

「なんだ？」

俺は手に持っていた日本の雑誌から目を離した。

ちなみに、雑誌は眺めてただけです。見てもわからないから。

「あの、ずっと気になってたんですけど、獄寺君達とはどういった関係なんですか？」

ツナヨシはもう大分俺に慣れたようで、ビクビクすることはなくなっていた。
嬉しい限りだ。

「…ん～。関係かぁ…。
…殺し屋繋がりで名前も顔も知ってるんだが、随分前に…二人とは俺が餓鬼の頃に会った事があるんだ。隼人とはそれ以来会ってねぇな。ビアンキとは三年前に一緒に仕事した…そんな関係かな。」

「へー。どこで会ったんですか？」

「隼人ん家だよ。アイツが金持ちなのはしってるか？」

「あ、はい。なんか凄い豪邸なんですよね？」

「そうそう。
…俺の家は代々殺し屋をしててな。ヴァリアーと違って雇われだから、いろんなとこと知り合いになる。隼人ん家もその一つだった。ある時パーティーやるから来ないかっていう招待状をうちの爺さんが受けとって、俺もついて行った。食事中ピアノを弾く音が聞こえてそっちを見ると、俺より小さい奴がピアノを弾いてた。それが隼人だった。」

「へぇ～。」

「俺もバイオリンを弾けたから、二人でデュエットして、ちょっとだけ仲良くなったんだったかな。
その後ちょくちょくあったけど、その頃以来会ってない。」

「凄いですね！そうだったんですか。」

目をきらきらさせながら俺の話を聞くツナヨシ。

「隼人とは友達なのか？」

俺はそんなサワダを見ていて、なんか学生時代を思い出した。
穏やかな普通の学生生活。それに昔から憧れてた俺。俺は普通の学生生活を送れなかったから……。

だからか、目の前にいる少年にいろいろ尋ねてみたくなったんだ。

「あ、はい。そうですね。学校が一緒なんで。それに…」

微妙な笑顔でそう答えるツナヨシ。きっとそれこそ微妙な関係なんだろうな。

「…それに？」

「俺の右腕になるって慕って来てくれるんで…。」

「ま、まじか！」

守護者がだいたい決まってるって話は聞いたけど、隼人が入ってい

るとは…しかも右腕狙い……。

「が、頑張って。」

「なんでそんな引き気味で言うんですか！？」

「はは～。なんでだろ…。」

そんなこんなで、ツナヨシにいろいろと学校の話を聞かせてもらい、来日一日目が終わった。

・・・・・・・・・・・・・・・

朝になる前に、俺は静かにサワダ家を後にした。
行く宛てなんてないけど、同じ場所に長いしたくないからね。俺の仕事上の癖みたいなもんだ。

同じ場所に長く滞在すると、居場所を敵に特定されかねないし、周りの人に迷惑をかけてしまう可能性が高い。
普通の殺し屋ならそうするもんなんだぜ？全く、ビアンキはもう少し自覚した方がいいと思うんだがな～…。

「…はぁ…。何処に行くかな。」

俺は住宅地を歩きながら呟く。まだ日が昇ってない町は酷く静だ。

ふと、上着に入っている仕事用の携帯を取り出した。

全く気づかなかったが、着信が一件入っていた。
やっちまったなぁと顔をしかめ、相手を確認する。

「…げ……なんで……」

驚き、自分の目を疑った。

『スクアーロ』

そうかかれていた…。

かけ直したくないけど、かけ直さないと煩い気がして…アイツが日本とイタリアのどっちにいて、時差は何時間あるのかとか考えずかけ直す事にした。

「もしもし…」

『う”ぉぉおい！
久しぶりだなぁぁ！

俺の名前は読めたらしいなぁ！』

「……。だいたい形でわかるよ…。」

あぁ、そう言えばこいつは知ってるんだったな。と思った。俺の最大の知られたくない秘密を…。

『聞いたぜ？九代目の依頼で日本にいるんだってなぁぁ。』

「あぁ。だから、悪いけど敵同士ってわけだ。」

『何も悪いこたぁねぇ。
こっちとしちゃぁ、面白れぇ限りだぁぁ。ここんとこ、テメェはずっと大人しくしてやがったしなぁ！』

「そうやって面白がっていられるのは自分達が勝つって思ってるからだろ…。
いつまで面白がってられるかね。」

『あ”ぁ？』

「俺が戦う事はないだろうが、ま、お手柔らかに頼むよ。」

『はっ！つまんねぇなぁ。
…そうだ。言い忘れるとこだったぜぇ。うちのボスがお前に用があるそうだ。』

「……は……？」

『近々そっちに行くだろうから、そん時にでも顔貸せ。』

「え。すっごい嫌なんだけど…。あの、何の用とか言ってなかった…？」

『さぁ？聞いてねぇぜ。
まぁ、このタイミングだぁ。良いもんじゃねぇだろ。
逃げんじゃねぇぞぉぉ。』

「……えへっ。」

『何が「えへっ」だぁぁあ！！俺は伝えたからなぁぁ！？』

ブチッ…！

俺は何も聞かなかった事にして電話を切った。
電源も切ろうと思ったが、流石に仕事上困るのでそれは押し留まった。

さらばスクアーロ。俺の代わりにボコボコにされてくれ。

こんな扱いをしている俺だが、スクアーロとは意外と仲がいい。スクアーロが比較的に話しやすいからだと思う。
ま、向こうは仲がいいなんてこれっぽっちも思ってくれていないとは思うけどね。

ピピピ…
ピピピ…

また携帯が鳴る。スクアーロかなと思って嫌々確認すると、知らない電話番号からだった。

「…はい。」

『こんばんは。いや、そっちはおはようかな？』

「…？」

『先だってディーノから紹介された者だ。君の番号はディーノから聞いた。』

「あ。なるほど…。
で、何の依頼ですか？ちなみに、今仕事が入っていて、用件次第じゃ俺は動けないんで…そこんとこよろしくお願いします。」

『忙しいのは知っている。君には人を一人消してもらいたいんだ。』

「…どなたを？」

『日本のT会社の社長だ。』

「…わかりました。」

『報酬は先に渡そう。君の仕事の成功率には定評があるからな。』

「じゃぁ、報酬は俺の口座に入れて下さい。金額はうちの爺さんから聞いて下さい。俺は仕事しかしないから。」

『ほう。変わったシステムだな。』

「はい。
いつ頃までおわせばいいでしょうか？」

『今週末までだ。』

「承知しました。では、また後ほど連絡します。失礼します。」

はぁ…。

「…さーて…、金が入るって爺さんに連絡いれるか。」

日はようやく上がり始めた。辺りは明るくなってくる。だが、様々仕事が出始めた俺の気持ちは沈んでいく気がする…。金が入ってくるのは嬉しいんだけどな。

いや……、そんなことより、俺の気持ちが沈んでいるのは間違いなくザンザスの呼び出しのせいだ…。

「…えげつない依頼されそ…。」

ここは強く言わせてもらうが、俺は何でも屋じゃない。
だけど、ザンザスの頼みなら基本的に何でも頼まれてやる。それが恩返しになると信じてるからだ。

俺がザンザスから受けた恩。
それは、薄汚い路地裏で生きていた俺の命を拾ってもらったというものだった…。

■■電話の電源を切りたくなる…■■（後書き）

ザンザスとの関係…気になりますね。
きっちょむも気になります（｜＿｜）！

次回はザンザスとの出会いについて書ければいいなと思います！

以上きっちょむでした！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2885ba/

～無音の奏者～

2012年1月10日19時54分発行